

Great Expectations

——作品のテーマと ‘self-help’ のコンテキスト——

吉 田 一 穂

1. ディケンズとスマイルズ

ヴィクトリア朝時代において最も普及した格言の一つに「天は自ら助くるものを助く」がある。労働の有益な倫理、すなわち、自助の精神は、その他の関連した美德の奨励と一体となって大衆的な媒体を通じて奨励された。その中でも特にヴィクトリア朝時代の価値体系と道徳的指針に甚大な影響を与えた作品にサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の *Self-Help* (1859) がある (Altick 170)。人々が自助努力によって生きるべきだとする社会的・道徳的教えである ‘self-help’ はいかに人間が向上することができるかというアドバイスを労働者階級・中産階級の人々に与えているが、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、スマイルズに言われるまでもなく、自助の精神を人生において実践してみせた作家である。子供時代に父親のジョン (John) が借財不払いのためマーシャルシー (Marshalsea) 監獄に入れられ、靴墨工場で働かなければならなかったにもかかわらず、作家としての成功を取めたディケンズの人生は、自助の精神に満ち溢れている。

ディケンズの自助の精神は自伝的小説 *David Copperfield* (1850) においてデイヴィッドが6カ国語に精通するにも匹敵する速記に熱心に取り組むことや、彼が言う言葉、「生まれつきの才能にしる、後天的な能力にしる、たえず一貫した精励努力もせず、ただ目的の達成だけを望むなどということは、到底ありえない、というのが私の信念である」(606) に明確に見てとれる。スマイルズの *Self-Help* にも、「怠け者は、どんな分野にしる、すぐれた業績

を上げるなどとうていできない。骨身を惜しまず学び働く以外に、自分をみがき、知性を向上させ、ビジネスに成功する道はない」(Smiles, *Self-Help* 30)と書かれてあるので、ディケンズは、スマイルズに成功哲学を教わる前にそれを実践していたことになるが、1812年という同じ年に生まれたディケンズとスマイルズには全く接点がなかったわけではない。¹

The Autobiography of Samuel Smiles には、1865年6月9日のステイプルハースト (Staplehurst) の鉄道惨事について書かれている。鉄道会社に勤めていたスマイルズは、エレン・ターナン (Ellen Ternan) が脱線事故による服の損傷に対し賠償を求めたとき、初めてディケンズが列車に乗っていたことを聞くが、5年後に亡くなったディケンズの死因については、「事故の衝撃が脳に消えない傷を残すことが時々あるにもかかわらず、ディケンズがこういった原因に悩まされていたとは聞いていない。彼はおそらく働きすぎ、朗読のしすぎ、不休のゆえに亡くなったのだろう」と述べている (Smiles, *The Autobiography of Samuel Smiles* 244-45)。このことから、スマイルズ自身 *David Copperfield* で語られるディケンズの自伝的部分とディケンズが自助の精神の持ち主であったことを知っていたと推察できる。*David Copperfield* にはスマイルズの奨励する自助の精神が見られるが、それは主に立身出世という観点からである。一方で、スマイルズの *Self-Help* に見られる「人間として向上する」という部分、すなわち人格的向上については、*David Copperfield* よりもむしろ *Great Expectations* に顕著に見られる。

ロビン・ギルモア (Robin Gilmour) は *Great Expectations* について、「ダンディズムが少しだけ見られるものの作品に直接関係のあるコンテキストは 'self-help' である」と述べている (Gilmour 112)。ただ、ギルモアは、実人生において自らを助けるものは、忍耐と自己修養によって自分自身を向上させる一方で、マグウィッチの金はピップをすぐに上流社会の生活ができるようにする、と述べ、忍耐なしにピップが自己修養 (具体的には紳士としての教育) の機会を与えられることを指摘している (Gilmour 115)。また、ジェローム・メキア (Jerome Meckier) は、"*Great Expectations and Self-Help* :

Great Expectations

Dickens Frowns on Smiles” (*JEGP* Vol. 100) において、自己を向上させることへの衝動を、社会的上昇と物質的に豊かになることへの願望と関連づけているので (Mechier 543), 社会的コンテクストからヴィクトリア朝時代において立身出世と関連づけてとらえられがちな ‘self-help’ を念頭に置き、ディケンズが作品においてスマイルズに難色を示している、と考えている。ギルモアが指摘している忍耐なしにピップが自己修養の機会を与えられているという事実は、作品を *Self-Help* への反論として読むことができる可能性を提示している。また、メキアも主に立身出世と関連づけて *Self-Help* を論じているがゆえに、作品を *Self-Help* に対する反論ととらえている。しかしながら、決してディケンズはスマイルズに難色を示しているわけでもなければ、‘self-help’ よりも ‘self-sacrifice’ を好むジョー (Joe) をスマイルズのヒーローたちのパロディと考えたわけでもない (Meckier 546)。なぜならば、*Self-Help* は、立身出世以外の側面からもとらえることのできる作品であるからだ。*Self-Help* は、立身出世という側面だけでなく、自分をいかに向上させることができるか、あるいは自分をいかに救い上げることができるかという側面を持ち、もう少し広い意味合いでとらえることのできる作品である。それは、ヴィクトリア朝時代の中で立身出世と関連づけられたとしても、倫理的・道徳的側面からも考慮されるべき作品である。*Great Expectations* について考えるとき、作品はどちらかと言うと、先に述べたように人格的向上、あるいは、倫理的・道徳的側面について ‘self-help’ のコンテクストがあると言え、ディケンズは「本当の紳士とは？」というテーマと関連させて ‘self-help’ のコンテクストを巧みに用いていると言えるかもしれない。ピップの人格的向上という観点から考えれば、*Great Expectations* と *Self-Help* は言わば同じことを言っているわけであり、対立する考えを述べているわけではなく、ジョーもまた人格的向上をピップに考えさせる人物であると言えるのだ。本論文では、作品のテーマである「本当の紳士とは？」と ‘self-help’ のコンテクストがいかに関係しているかについて述べてみたい。

2. Self-Culture

ピップの人生は大きく3つの段階に分けて考えられる。すなわち、紳士階級の仲間入りをする前、紳士階級の仲間入りをした後、紳士階級からの陥落後である。この中の紳士階級の仲間入りをする前と紳士階級の仲間入りをした後という段階において、*Self-Help* において見られる自己修養 (self-culture) の考えが見られる。ただ、*Self-Help* における自己修養の考えは *Great Expectations* よりもどちらかというといふ *David Copperfield* において見られる自己修養の考えに近い。スマイルズは *Self-Help* において「最高の教育とは、人が自分自身に与える教育である」、「学校教育は、真の教育の手始めにすぎず、精神を鍛え勉強の習慣をつけるという意味でのみ価値がある」、「いつの時代も、最良の教師たちは自己修養の重要性を真っ先に認め、自力で知識を習得するよう励ましてきた」と述べているが (Smiles, *Self-Help* 261), *Self-Help* における自己修養とは能動的に学ぶ姿勢が大切であるということを行っている。このことから、独学で速記術を身につける過程を描いた *David Copperfield* の自己修養の方が能動的に学ぶという観点から、*Self-Help* における自己修養に近いと言えるが、*Great Expectations* においてもピップが紳士階級の仲間入りをする過程において自己修養が見られる。

まず、ピップの教育的機会は、ウォプスル (Wopsle) 氏の大伯母によって与えられる。彼女は村で夜学の塾を開いているが、これは、デйм・スクール (dame school) である。かつてイギリスでは年とったあるいは身体障害のある男性や女性は、しばしば近所の子供たちの勉強をみることによって生活費をかせいだが、ウォプスル氏の大伯母は、教育的機会を与えるかわりに毎週2ペンスを子供たちから受け取っている。かつてこういったデйм・スクールは教育の改革者たちによって批判された。教育の改革者たちは、デйм・スクールを無学な人が子供に行う教育の例として持ち出した。実際のところは、デйм・スクールには異なるレベルがあった。批評家が主張しているように、悪いデйм・スクールもあったが、少しの基礎教育を行ったデйм

Great Expectations

・スクールもあった。その基礎教育とは、一週間につき2ペンスで読むことを教えたり、一週間につき3ペンスか4ペンスで書くことを教えたりする教育であった。それを終えると、子供たちはさらに高等な科目を教える一般の昼間の学校に進学することになっていた。デイル・スクールも日曜学校もその教育の効果がないと教育改革者たちに批判されたが、貧乏人が行ける学校であり、基礎の読み書き能力を教えたのは、こういう学校であった。²

ディケンズは「誰の助けもうけない自分の力で」(40)と書いているが、これは、ウォプスル氏の大伯母がよく居眠りをしていたためであり、ピップはビディの助けを受けアルファベットと9つの数字を学び、さらに読み書き計算ができるようになる。ある晩ピップはジョーへの手紙を書くが、ジョーは、手紙の中に自身の名前ジョー (Joe) を発見するものの、姓のガージャリ (Gargery) は書けないと言う。さらに彼は、「わしになにかいい本を一冊か、いい新聞を一枚もたせて、暖かい火の前にすわらせてごらん。わしはもうなんにもほしいとはいわんよ、ほんとうに!」、[J]の字とOの字を見つけて『そうら、とうとう Joe があったぞ』っていうことになる、本を読むっておもしろいこったろなあ」(41)と言う。ピップはこの言葉を聞き、ジョーの教育がきわめて幼稚なものだと推察する。ジョーは、父親に邪魔されて途中で勉強を断念し、仕事をせざるを得なかったと言っているが、このことは、ジョーがデイル・スクールレベルの学力も身につけていないことを示している。ハリソン (John F. C. Harrison) は、*Self-Help* について「スマイルズのもともとの目的は、労働者階級の人々がどのように向上しうるかということを示すことであった。しかし、労働者階級の大部分にとってこのことは実現不可能であった」と述べているが (Harrison 870)、教育的機会という観点から労働者階級の人々が立身出世するのは、非常に困難なことであったと言わざるをえない。メキアは、ジョーが社会的に上昇することを拒否することについて、賞賛すべきことがらであり、スマイルズの 'self-help' の理想より崇高なことがらである、と述べているが (Meckier 546)、現実的に考えてもジョーが社会的に上昇することは、困難なことなのである。後に、ジョー

はロンドンにいるピップを訪問するが、帰る間に言う言葉、すなわち、「なあピップ、世の中というものは、いろんなものが結びついてできているとっていいと思うよ。鍛冶屋になるものもいれば、銀細工師になるものもいるし、金細工師になるものもいる。また銅細工師になるものもあるだろう。こういうふうには、みんなのあいだに分業が生まれなくちゃならんし、また生まれたようにうけとらなくちゃならん」、「おまえとわしは、ロンドンでいっしょになるべきもんじゃないんだ」(212)は、ジョーが自身がいる階級を十分に認識しているだけでなく、社会的に上昇することが困難であることをも認識していることを示している。

ピップもサティスハウス (Satis House) でミス・ハヴィシャム (Miss Havisham) とエステラ (Estella) に出会い、自分がつまらない労働者の子供だということ、自分の手がざらざらしていること、自分の靴が厚いどた靴だということに劣等感を感じなければ、立身出世を夢みることはなかったであろう。サティスハウスで自分の階級について認識したピップは、ミス・ハヴィシャムやエステラのいる世界に近づこうと考え、ビディに知っていることを全て教えてもらうのが一番いい方法だと思いつく。どうしても出世したいと思っているというピップの願望を聞かされたビディは、聖書の読み方を教えるが、これは日曜学校でよく行われた教育法である。日曜学校は一週間ずっと働いている子供たち (ときには大人たち) に教育を提供したが、日曜学校のももとの任務は、人々に聖書を読む技術を提供することであった。朝昼の授業において聖書が読み書き能力を教える教科書として使われた。³ このことにより、労働者階級のピップは不十分ではあるがデイル・スクールと日曜学校で行われている教育を受けたことになるが、大いなる遺産の相続の見込みが伝えられ、ジョーが鍛冶職人の年季証書を火に投込んだ後、彼の受ける教育は変化する。

次に彼が受ける教育とは、紳士階級の一員としての教育であり、マシュー・ポケット (Matthew Pocket) とハーバート (Herbert) によるものである。ピップは、ポケット氏のアドバイス、すなわち、ロンドンの2、3の学校へ

Great Expectations

通って、自分に欠けている初歩の学問を勉強し、勉強を説明したり、指導する役割は彼にまかせるということ、に従いそれを実行に移す。ポケット氏がジャガーズから聞いた教育水準、すなわち、たいていの裕福な若者たちにひけをとらなければ、それで十分であるという教育水準から考えると、ピップの受けた教育は十分な教育であると言っていいだろう。ハーバートはロンドンではナイフを口の中へつつこまない習慣だとか、食べ物を口に入れるためフォークを使うが、必要以上に口の奥に入れないとか、スプーンを下から持つとか、テーブルマナーについてもピップに教え、マシューとハーバートはピップが書物を読む手助けをする。しかし、ハンフリー・ハウス (Humphrey House) が指摘しているように、読者は、ピップが読んでいるものについて知らないし、彼が読んだものが彼の心に与えた影響もそこから得た楽しみも知らない (House 160)。ディケンズとしては、パブリック・スクールのハロー (Harrow) 校とケンブリッジ (Cambridge) 大学で教育を受けたポケット氏からピップが教育的指導を受けたことを示すだけで十分であったのだろう。それ以上にディケンズが示したかったことは、ハーバートがミス・ハヴィシャムの過去について語るときに言う父親の持論「心根の立派な紳士でない人間が、態度の立派な真の紳士になったためしは、世が始まって以来いまだかつてない」(171)に見られる「本当の紳士とは？」という作品のテーマであると考えられる。

3. 人格的向上

ここで、*Self-Help* の第13章に目を移してみたい。第13章のタイトルは“Character—The True Gentleman”であり、ディケンズが *Great Expectations* で提示するテーマ「本当の紳士とは？」と重なり合う部分がある。第13章には「人生の王冠であり名誉は人格である」、「人格の力は富よりも強い」、「人格者は社会の良心であり、同時に国家の原動力となる」、「教養や能力に乏しく財産の少ない人間でも、立派な人格さえ持ち合わせていれば、他人に大きな影響を与えられる。たとえ、それが工場であろうと、会計事務所であろう

と、市場であろうと、議会であろうと事情は変わらない」などの言葉が見られる (Smiles, *Self-Help* 314-15)。これらの言葉は、*Self-Help* が立身出世だけでなく、人格的向上、あるいは、倫理的・道徳的向上をも取り扱っていることを示している。

ピップは、パンブルチュック (Pumblechook) と姉にミス・ハヴィシヤムの家の中のことについて、実際はないのに黒いピロードの馬車があったとか、犬が四匹いたとか言い、嘘をつくが、ジョーはピップに対して、「もう嘘なんかいっちゃいかんよ、ピップそりゃ平凡なことから抜け出す道じゃないよ」(65)、「もしおまえがまっすぐなことをやってえらい人間になれるのなら、曲がったことをやったからって、えらい人間になれるもんじゃけっしてない」(66) と忠告する。このようなジョーは労働者階級に一生涯とどまったままであるが、読者に人格の大切さを痛切に感じさせる存在であると言える。ジョーのピップに対する精神的感化は、次のように語られている。

For, though it includes what I proceed to add, all the merit of what I proceed to add was Joe's. It was not because I was faithful, but because Joe was faithful, that I never ran away and went for a soldier or a sailor. It was not because I had a strong sense of the virtue of industry, but because Joe had a strong sense of the virtue of industry, that I worked with tolerable zeal against the grain. It is not possible to know how far the influence of any amiable honest-hearted duty-doing man flies out into the world; but it is very possible to know how it has touched one's self in going by, and I know right well that any good that intermixed itself with my apprenticeship came of plain contented Joe, and not of restless aspiring discontented me. (101)

というのは、ついでにここで言うところのいっさいの美点は、ことごとくジョーのものだったからである。私が逃げ出して、兵隊か水兵にならなかったのは、私が誠実だったためではなくて、ジーが

Great Expectations

誠実だったからである。私が気にそまぬながらも、かなり熱心に仕事をやったのも、私に強烈な勤勉の美徳が備わっていたからではなく、ジョーに強烈な勤勉の美徳がそなわっていたためである。やさしくて正直な心を持つ、義務に忠実な人間の感化というものが、世の中にどのくらいひろがってゆくものか、それを知ることはできない。だが、通りすがりにその力が自分の魂に触れたことを知ることは、大いに可能である。もしも私の年季奉公のうちに、なにかの美点がまじりこんでいたとすれば、それは全て朴訥な、満足しきったジョーから生まれたものであって、落ち着きもなく、野心に燃えて、不満ばかりいっていた私から生まれたものではなかった、ということ、私はよく知っている。

引用の「やさしくて正直な心を持つ、義務に忠実な人間の感化というものが、世の中にどのくらいひろがっていくものか、それを知ることはできない。しかし、通りすがりにその力が自分の魂に触れたことを知ることは、大いに可能である」という部分は、先に述べた *Self-Help* の「教養や能力に乏しく財産の少ない人間でも立派な人格さえ持ち合わせていれば、他人に大きな影響を与えられる」という部分を思い起こさせる。ジョーの場合は、鍛冶職人としての能力はあるが、教養に乏しい人間である。しかし一方で、作品の後半部分でディケンズは、彼のピップに対する影響について我々に示している。ピップの遺産相続の希望は、マグウィッチが出現し、彼が逮捕されるがゆえに消え失せてしまうが、ジョーは、紳士階級から陥落し病気になったピップを看病し、彼の借財を全て払う。かつてジョーがバーナズ・インへ来ることを知ったとき「もし金で彼を遠ざけておくことができたとしたら、わたしはきっと金を出したことだろう」(206) とかつての友を疎ましく思ったピップであったが、かつての自分が卑劣で不当だったと感じジョーに赦しを乞う。赦しを乞うピップに対しジョーは、「もしわしがお前を赦すなんてことがあるとしたら、わしがお前を赦すことは神さまがご存知だよ！」(455) と言って完全に彼を赦す。スマイルズは *Self-Help* で「金も階級も純粋に紳士的な

性質とは関係ない。貧乏人でも精神において日常生活において、本当の紳士になることができる」(“Riches and rank have no necessary connexion with genuine gentlemanly qualities. The poor man may be a true gentleman,—in spirit and in daily life.”)と述べているが (Smiles, *Self-Help* 327), ジョーは労働者階級の人間ではあるが、スマイルズの言う純粹に紳士的な性質を持つ人間だと言える。このように考えると、ジョーは読者に「人格的向上をともなわぬ成功は本当の成功とは言えない」というディケンズとスマイルズの共通する見解を示す存在であると言える。

“gentleman”とは、イギリスにおいて初めのうち明らかに身分階級を示す言葉であったが、ヴィクトリア朝時代に入ってからその概念が総括的になり、倫理的・道徳的色合いが濃くなった。ディケンズは、*Great Expectations* において倫理的・道徳的観点からも紳士であると言えなければ本当の紳士でないということを提示することにより、スマイルズの定義に同意し、現代的な紳士を提示したと言える (Sinnema xix)。紳士に倫理的・道徳的側面が問われることとなった背景として、ヴィクトリア朝時代において新興中産階級が紳士になりたがったという背景が挙げられる。紳士になる方法としては、一つには、土地所有があり、もう一つには、紳士としての品性を身につけることが挙げられるが、紳士としての品性を身につける方法として、教育的手段がとられた。具体的には、イートン (Eton) 校、ハロー (Harrow) 校、ウィンチェスター (Winchester) 校、ラグビー (Rugby) 校などといったパブリックスクールからオックスフォード (Oxford), ケンブリッジ (Cambridge) を代表とする有名校に進学することがエリートコースであり、紳士に近づく方法であった。注目に値することは、この時代におけるトマス・アーノルド (Thomas Arnold, 1795-1842) とヘンリー・ニューマン (Henry Newman, 1801-90) の考え方である。トマス・アーノルドはマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の父親でありラグビー校の校長として有名であったが、教育理念として、知的向上だけでなく、人格的・道徳的向上や紳士として理想的な振る舞いができるようになること、を掲げた (Mitchell 173)。

Great Expectations

また、ヘンリー・ニューマンは、*The Idea of A University* (1852) の中で、本当の紳士のあるべき姿について述べている。「本当の紳士の重要な関心事は、全ての人が心地よくいられることであり、彼は全ての人々に対して注意を怠らない。彼は内気な人に対してもあまり親しくない人に対しても優しい。彼は敬愛と献身を尊重する」(Newman 217-18) などは、本当の紳士には、倫理的・道徳的側面が必要であるというニューマンの考えの表れであると言える。このように、教育の分野で本当の紳士の定義に倫理的・道徳的側面が付け加わるようになったことを見落としてはならない。

Great Expectations においてこのような紳士の倫理的・道徳的側面を強調するため、ディケンズはハーバートにミス・ハヴィシャムの過去について語らせている。ミス・ハヴィシャムは地方の大地主であり、酒造家の父親の娘、すなわち紳士階級の娘として甘やかされて育てられたが、派手好きな男コンピソン (Compeyson) に言い寄られ、結婚することになっていた。しかし、コンピソンは結婚式にやって来ず、結婚を破棄したのであった。このとき以来、ミス・ハヴィシャムは復讐心を持ち続け、養女のエステラをあらゆる男性に復讐するように育てる。ピップも彼女の復讐心の犠牲者となるのであるが、もしミス・ハヴィシャムがコンピソンを心の中で赦し復讐心を持っていなければ人格的にも立派なレディということになっていたであろう。サティスハウスに出入りする事は、ピップにとって階級意識を飢えつけられる意味しかない。以下の引用には、ピップのコンプレックスが示されている。

She laughed contemptuously, pushed me out, and locked the gate upon me. I went straight to Mr. Pumblechook's, and was immensely relieved to find him not at home. So, leaving word with the shopman on what day I was wanted at Miss Havisham's again, I set off on the four-mile walk to our forge; pondering, as I went along, on all I had seen, and deeply revolving that I was a common labouring-boy; that my hands were coarse; that my boots were thick; that I had fallen into a despicable habit of calling knaves

Jacks; that I was much more ignorant than I had considered myself last night, and generally that I was in a low-lived bad way. (59-60)

彼女はあざけるように笑って、私を突き出して、門に鍵をおろした。私は、まっすぐにパンプルチュックさんの家に行った。そして、彼が家にいないのを知って、心からほっとした。そこで、こんどまた、ミス・ハヴィシャムの屋敷に出かける日の言伝を番頭さんに頼んで、4マイルあるわが鍛冶場にむかって出かけた。そして、道々、今日見たいろんなことを考え、自分つまらない労働者の子供だということ、自分の手がざらざらしていること、自分の靴が厚いどた靴だということ、自分は兵隊（ネイブ）をジャックだなんて言ういやらしい癖がついているということ、自分はゆうべ考えたよりはるかに無知だということ、そして、つまり自分は、下等な、いやらしい生活をしているのだということをつくづく考えた。

「まあ、なんてざらざらした手をしているの！まあ、なんて厚いどた靴なのよ！」(55) というエステラは、ピップのことを労働者の子供と呼び、*Beggar My Neighbor* というトランプゲームでピップを無一文にしてしまう。

Self-Help には、大英帝国のすみずみまで奴隷制度廃止を徹底させるという大事業を行った人物、すなわち、下院議員のファウエル・バクストン (Fowell Buxton) の例が示されているが、彼の場合、教養豊かで博愛心に富んだ名家であるガーニー (Gurney) 家との交わりが人生を良き方向に導く。ガーニー家の人たちに教養を高めるよう強く勧められたバクストンは、ダブリン大学へ入学し、優秀な成績で卒業するまでになる。このことに関し、バクストンは自身の気持ちを、「ガーニー家の人たちが応援してくれて取れた賞状を彼らのところへ持ち帰りたい」と言った (Smiles, *Self-Help* 219)。このことから、バクストンの奴隷解放運動の背景にガーニー家が大きな役割を果たしていることは疑いがない。一方でピップの場合、サティスハウスに出

Great Expectations

入りすることは、教養を高めるところか、階級の違いにより人間を判断するという間違った価値観を持つきっかけとなるべきことであり、人生において害しかもたらさない。コンピソンに対し復讐心を持ち続けるのは、ミス・ハヴィシャムだけではない。マグウィッチもまたコンピソンに対し復讐心を持ち続けるのである。

盗んだ札を使ったという嫌疑で裁判されたとき、マグウィッチは、不平等な扱いを受ける。マグウィッチとコンピソンの人物証明によりマグウィッチは不利になり、コンピソンが7年の刑を受ける一方でマグウィッチは14年の刑を受ける。二人が脱走したときもコンピソンの処罰が軽くすむ一方、マグウィッチは育ちの違いにより生涯の追放に処せられる。このような不平等な扱いを受けた結果、マグウィッチはコンピソンに恨みを持ち続けるだけでなくコンプレックスを持ち、ピップを紳士にすることでコンプレックスを解消しようとする。オーストラリアに流刑にされたマグウィッチは、ニューサウスウェルズ (New South Wales) で牧羊者となりピップを紳士にするため懸命に働く。このようなマグウィッチは *Self-Help* において奨励される勤勉を実行していると言えるが、その行為はピップを犠牲にしていることにより、倫理的に奨励されない行為であると言えるのだ。メキアは、マグウィッチに高潔な理想、復讐よりも価値のある目的が欠けていて、スマイルズ的エネルギーを誤って邪悪な目的、すなわち、社会に対する積年の恨みをはらすことに向けていることを指摘しているが (Meckier 548)、小説のテーマ「本当の紳士とは？」を読者に考えさせるために、あえてディケンズは、復讐心に満ちあふれたマグウィッチを描き出していると言える。

帰国禁止命令に逆らいピップに会いにきたマグウィッチは、「わしがお前を紳士にしたんだ」(304) と言って、自身がピップの遺産の源であることを明らかにする。イギリス本国へ帰ることは許されていなかったが、マグウィッチに対する帰国禁止命令は、それを破ると死刑になる命令であった。この帝国主義的命令の背景には、イギリスにおける犯罪の増加とそれにとまなう刑罰の方法に関する議論があった。1770年代において犯罪者は増加傾向にあ

り、監獄は債務者の増加により混乱状態にあった。1775年における流刑の中断が危機的状況を招いたので、政府は一時的な監禁場所として1776年老朽船の使用という解決法を見出した。この老朽船は後に牢獄船 (hulks) と呼ばれるようになる。囚人たちは、牢獄船において監獄より厳しい扱いを受けた。彼らは、制限された規定食を課せられ、重労働であるテムズ川や港市の清掃作業に駆り立てられた。犯罪に満ちあふれていたイギリスでは一時的に絞首刑が用いられていたが、1783年頃には、世論は流刑へと傾いた。その結果1787年に最初の船がオーストラリアに向けて出港したのであった (MacGowen 76)。帰国禁止命令に逆らいピップに会いにきたマグウィッチの行為は、帝国主義への反乱ともいっていい行為である。また、ピップを紳士にしたということで、イギリスの階級システムへの反乱ともとれる。ピップは実質的にマグウィッチの逮捕により紳士階級から陥落するが、作品において重要なことは、倫理的側面であり、ディケンズは金だけでは紳士にならないということを強調していると考えられる。

結 び

以上、*Great Expectations* のテーマである「本当の紳士とは？」と 'self-help' のコンテキストがいかに関係しているかについて考えてきたが、ディケンズはスマイルズが *Self-Help* の第13章 “Character—The True Gentleman” で述べていることをピップの紳士階級への仲間入りと紳士階級からの陥落を通して効果的に描き出していると言える。作品の倫理的側面を考慮すると、'self-help' よりも 'self-sacrifice' を好むジョーをスマイルズのヒーローのパロディととらえるメキアの見解には無理がある。また、メキアが目するスマイルズ流のやり方でジョーが階級の上昇をしないことに関しても、現実的にジョーが階級の上昇することは、教育的機会が与えられなかったことにより、不可能と言ってもいい。さらに、ジョーがピップがまっとうに生きるため戻らなくてはならない倫理的基準を象徴しているとすれば、ジョーが階級の上昇をするかどうかは、問題ではない。

Great Expectations

ピップが紳士階級から陥落したにもかかわらず、病気の間看病し、借財を代わりに払ったジョーは、「人格的向上をとまなわない成功は本当の成功とは言えない」ということを示すための人物であると言える。このようなジョーをピップは「やさしいキリスト教徒」(“gentle Christian man”)と表現するが、ディケンズは、教養がなく一介の労働者であるジョーが他者へ及ぼす影響力を示すことにより、スマイルズと同じ見解、すなわち「人格者は社会の良心である」(Smiles, *Self-Help* 314)を物語の中で解りやすく解説した、と言っているだろう。

注

* 本稿は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部大会（2005年10月8日、於甲南大学）において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1. サミュエル・スマイルズは、1812年12月23日スコットランドのハディントン (Haddington) で製紙業者兼商人の息子として中産階級の子に生まれた。5年の医学の見習い期間の後、スマイルズは住んでいる町で開業した。彼は1839年 *Leeds Times* の編集者の仕事を引き受けたが、1843年に医学に戻った。彼は1843年サラ・アン・ホームズ (Sarah Ann Holmes) と結婚したが、Leeds and Thirsk Railway の書記補佐になるため1845年医者をやめた。1854年スマイルズは、South-Eastern Railway に努めることになった。そこで彼は、保険業に携わるまで20年間働いた。執筆に専念するためにスマイルズは、1871年保険業をやめた。6年間にわたりスマイルズは、何百もの新聞記事を書き25冊の本を出版した。最もよく知られた著書の中には *The Life of George Stephenson* (1857), *Self-Help* (1859), *Lives of the Engineers* (1874) がある。彼は1904年4月16日ケンジントン (Kensington) で亡くなった (Sinnema vii)。
2. 統計学会が調べたところによると、1830年代のマンチェスター (Manchester) において54パーセントが日曜学校にのみ通い、残りは16パーセントが一般の昼間の学校に通い、11パーセントが普通のデイル・スクールに通っていた (Doyle 356)。
3. 1841年の国勢調査は、読み書きができるのは、男性67パーセント、女性51パーセントと報告した。いずれにせよ、労働者階級の中で2、3年以上全日制の学校に通っている人はほとんどいなかった (Mitchell 166)。

Works Cited

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: W. W. Norton & Company, 1973.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.
- . *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.
- Gilmour, Robin. "Pip and the Victorian Idea of the Gentleman", in *Great Expectations: Contemporary Critical Essays*. Ed. Roger D. Sell. London: Macmillan, 1994.
- Harrison, John F. C. "Samuel Smiles", in *Oxford Companion to British History*. Ed. John Cannon. Oxford: Oxford UP, 1997.
- House, Humphrey. *The Dickens World*. London: Oxford UP, 1961.
- MacGowen, "The Well-Ordered Prison: England, 1780-1865", in *The Oxford History of the Prison*. Ed. Norval Morris, David J. Rothman. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Meckier, Jerome. "Great Expectations and Self-Help: Dickens Frowns on Smiles", in *JEGP* Vol. 100. Urbana: The University of Illinois Press, 2001.
- Newman, John Henry Cardinal. *The Idea of A University*. New York: Image Books, 1959.
- Mitchell, Sally. *Daily Life in Victorian England*. London: Greenwood Press, 1996.
- Royle, Edward. *Modern Britain: A Social History 1750-1997*. Second Edition. New York: Oxford UP, 1987.
- Sinnema, Peter W. Introduction to *Self-Help*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Smiles, Samuel. *Self-Help with Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- . *The Autobiography of Samuel Smiles*. Ed. Thomas Mackay. London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.
- 松村昌家, 『十九世紀ロンドン生活の光と闇——リージェンシーからディケンズの時代へ——』, 京都, 世界思想社, 2003.

***Great Expectations* :**
The Theme of the Novel
and the Context of 'Self-Help'

YOSHIDA, Kazuho

Samuel Smiles's best-selling *Self-Help* (1859) had an incalculable effect on Victorian's value system and moral orientation. *Self-Help* gave people of working class and middle class the advice that they should live by indefatigable industry and perseverance. Charles Dickens (1812-70) put the principle of self-help into practice in his life. *David Copperfield* (1850), his autobiographical novel, shows Dickens's practice of self-help. The life of Dickens who succeeded as a writer although John, his father, had been imprisoned in the Marshalsea prison and he had to work at Warren's Blacking warehouse, is full of the spirit of self-help.

Jerome Meckier thinks that Dickens equates the impulse toward self-improvement with base cravings for social and material advance. In "*Great Expectations* and *Self-Help*: Dickens frowns on Smiles", Meckier tries to show that Dickens frowns on Smiles from the viewpoint of self-help which is often related to success in society in *Great Expectations*. However, Dickens does not frown on Smiles and does not consider Joe who prefers self-sacrifice to self-help as a parody of the Smilesian hero, because *Self-Help* can be considered from the aspects other than success in society. It should be considered from the viewpoint of morality and ethics, although it is connected to success in society.

This paper shows how the theme of *Great Expectations* has connection with the context of 'self-help', and that Dickens effectively represented Smiles's opinion in "Character—The True Gentleman" (Chapter 13 of *Self-Help*), in Pip's joining gentleman class and fall from it. Meckier is wrong in thinking that Joe who prefers self-sacrifice to self-help as a parody of the Smilesian hero when we consider Joe from the viewpoint of ethics of both works. Meckier observes that Joe does not rise in the world in Smilesian way, but a rise in the world is an impossibility for him because he could not get the opportunity of education.

Moreover, it does not matter whether Joe can rise in society or not, if he symbolizes an ethical standard to which Pip must get back to live an honest life. Joe who nurses Pip as a patient and pays Pip's debt although Pip fell from gentleman class, is a character who shows that a poor man may be a true gentleman in spirit and in daily life; Pip expresses Joe as "a gentle Christian man". Dickens agrees with Smiles's opinion and clearly explains that the crown and glory of life is character and that it exercises a greater power than wealth, by showing the great influence of Joe who is an uneducated and mere blacksmith on Pip.